

いじめはなぜ悪いのか？

最近、SNS上における暴力行為等の動画の投稿・拡散が、日本中の緊急教育課題になっています。今回は、なぜ、暴力行為を含めたいじめが悪いのか？相手がかわいそうだとか、道徳的にどうかというだけでなく、悪い理由を明確に示しておきたいと思えます。以下、1つの研究に基づいた理論がありますので、この場を借りて紹介します。

日本薬科大学の永田先生が、いじめと脳の関係について興味深い研究をされています。

人間の脳というのは、3つの部分からできています。もっとも深い部分にあるのが脳幹です。これは呼吸をしたり、ものを食べたり、排泄をしたり、睡眠を取ったりというような生命を維持するために必要な命令を出している部分です。ヘビやトカゲといった爬虫類にも備わっている脳で、「ヘビの脳」と呼ばれています。その外側にあるのが旧皮質。この部分は喜んだり、悲しんだり、怒ったり、泣いたりするための脳です。つまりは感情を司る働きをしています。犬やネコなどの哺乳類に備わっている部分で、これを「ネコの脳」と言います。そして一番外側にあるのが新皮質です。この部分こそが人間を特徴づけているものです。この新皮質があるからこそ、私たち人間はものを考えたり、覚えたり、言葉を話したりすることができます。これは「ヒトの脳」と呼ばれる部分です。人間が生きていくためには、この3つの脳が正常に働いていなければなりません。どれか1つがダメージを受けても、私たちは生きていくことができなくなるものです。

実はいじめというのは、生命維持の根幹である「ヘビの脳」つまり脳幹にダメージを与えるということがわかりました。脳幹を攻撃されると、人間の生命力はどんどん衰退していきます。言葉を変えると、生きていく気力が失われていきます。つまりいじめという行為は、人の生きていく気力を奪うもの、それは殺人に匹敵する行為なのです。これは犯罪です。

魚を飼っているとよくわかるのですが、魚も大ゲンカをします。帰宅して水槽を見ると、何かおかしい。1匹、ボロボロになった魚がいます。助けようと、水槽に仕切り板を入れたり、別の水槽に避難させたりしましたが、翌日ひっくり返って死んでいることが多く、うまく助けられた記憶はありません。やられて生きる気力を失い、自死したのだらうと思えます。

私たちが子どもの頃と違い、携帯電話、メール、SNS、オンラインゲーム等、大人が知らないところで、子どもたちの世界が作られています。情報が増える分、対応するべき現実が増え、それに比例して、不安も増します。どの子どもも、自分や友だち関係への不安を抱えながら、「自分らしくありたい」と願い、日々を懸命に生きています。時には友だちにお愛想して、自分らしくないことをしてしまい、後悔する。でも、なかま外れは嫌だ、あいつ根性なしと言われるのは嫌だ、心は千々に乱れています。子どもたちの気質の変化、環境の変化等、対応すべき要因を挙げていけばキリがありません。もちろん、そういった要因を分析し、把握し、適切に対応していくことは重要です。しかし、何が変化しようと、私たち大人、つまり親、教師がもっておくべきものがあります。それは、「365日、一日たりとも、いじめは絶対に許さない」という確固たる姿勢です。それは、いじめは殺人に匹敵する行為、つまり犯罪だからです。その確固たる姿勢を支えるものは、「子どもたちの人生は、全く区別なく、どの人生も全て素晴らしい。そうあるべきである」という強い信念です。どうぞ、共通理解・共通行動をお願いいたします。

豊かな心

嬉しいニュースが舞い込んできました。2/13(金)の下校途中、ガス欠で困っていた人を見つけた3年生男子が、車をガソリンスタンドまで押してあげたそうです。「困っている人を放っておけませんでした」という言葉に、彼らの心の成長を感じ、大変嬉しかったです。

